

歌人伊藤左千夫

貞光 威 (さだみつ たけし)

昭和6年 岐阜県生まれ。

昭和29年 名古屋大学文学部国文学科卒業。

昭和51年 立命館大学大学院修士課程修了。

現在 岐阜教育大学常勤講師。

著書 『万葉集巻五の研究』(昭50), 『万葉百秀歌』
(昭52)

論文 「山上憶良詠宴歌について」(昭48) など。

現住所 岐阜市芥見諏訪山団地80の377

歌人伊藤左千夫

昭和五四年九月一五日 初版印刷
昭和五四年九月二〇日 初版発行

定価 二二〇円

著者 ©貞光威

発行者 及川篤二

印刷所 足柄製版印刷(株)

101 東京都千代田区猿樂町二一八一—三

(株) 桜楓社

(電話) (〇三) 二九五—八七七—
(振替) 東京六一八〇二〇

歌人伊藤左千夫

扉題字 国崎望久太郎

貞光威君の『歌人伊藤左千夫』に序して

木俣 修

貞光威君を識ったのは、松井利彦君の紹介によるもので、今から十年ほど前のことであった。そのころ、私の勤務している大学の大学院の要員として岐阜から松井君に来てもらっていたので、しばしばその東道で岐阜の各地に赴いたり、またそれより早く中日新聞社の文化センターの日本文学講座を担当していて、月に一、二回名古屋へ出向き、そこでも松井君に会っていた。松井君はそういった時、いつも岐阜の国文学研究に志す新人の誰彼を連れて来て私にひき合せたのであったが、その中の一人に貞光君がいて、同君とも親しくなったというわけである。

聞くところによると貞光君は名古屋大学の文学部国文学科出身で、高木市之助博士の指導をうけて万葉集の研究をしたということであった。私は高木博士ともそれよりずっと前から知を得ていたので、その後博士に会って貞光君のことを話題としたことがあった。その時、「あれは無口でおとなしいが、誠実で芯がある。よろしく頼むよ」などと博士は言われた。そんなことから私はある出版社から頼まれて万葉集に関するかなり面倒なしごとをやることになって、同君に助力をして貰うことにしたことがあった。それは事情によって未刊に終ったが、しかし貞光君の誠実

に努力してくれたことをいつか生かしたいと思っている。

その後、近代短歌に関しても興味を持ち、立命館大学の大学院に入り、国崎望久太郎教授の指導をうけて近代短歌に於ける万葉集の受容の様相を主題とする研究をしているということを開いていたのであるが、その成果については知ることがなかった。

ところがさきごろ、諸雑誌などに発表した伊藤左千夫に関する研究論文を一本にまとめるから一覽してほしいと、すでにゲラ刷になった十一篇の論文の一束を持参された。私は君の精進の成果の一部がいよいよ世に出ることになったことを喜び、寸暇をさいて、諸論に眼を通したのであるが、長年にわたる万葉集討究の豊かな素地に立った討究であるだけに、子規の門人中、ほとんど独学であるにもかかわらず、最も万葉集の精神をその作家としての血液の中に深く浸透させた左千夫作品の本質の解明に新しい洞察を加えた重厚な作業の遂げられているということを確認することができた。そういったことを詳しく述べるとりはないが、三章に分けられた諸論のどの章についてもその事は言い得ると思う。しかし左千夫は基本的には言うまでもなく万葉集一辺倒子規歌論随順の作家であるが、明治に生を遂げた人である以上、その時代の風潮を超越することは出来なかつた筈である。事実、左千夫は折しも文壇のメインカレントとして、君臨していた自然主義の潮流に眼を覆うことはできなかつた。彼がその自然主義とどういう経緯において、そしてどういう角度においてそれに関わつたかということ貞光君は精細に論じて、左千夫の文学者像に新しい照射を与えている。そこには小説家としての左千夫の実体をも含めて論じられていて開

くべき点が多いのである。

左千夫と長塚節との対峙の相を実証的に解明した論なども、従来の研究から抽んでた説得性を持った好論である。

さらにまた「二つの『山会』」と題する論文において、『ホトトギス』に拠る俳人たちの「山会」と左千夫を筆頭とする歌人たちの「やま会」との関りの実態を詳細に踏査して、左千夫の写生文に關する見解を明確にしていることなども目新しく興味が深い。

諸論の一事についてなお言いたいことも多々あるが、今はもう省略に従わなければならない。諸論すべて夥しい文献を博搜して実証的に運ばれているので、立論に対しての不安や不信を持つことがなく、読後の感清爽である。一切が実証だけで終るといことが文学研究の理想であると必ずしも思わないが、貞光君の真摯で、かつ虔虚な学問的態度に対して私はこころうたれるものがあつた。

私は貞光君がなお研究を進めて、子規系の諸多の歌人たちに及ばずさらに、その対立者たちにも君の見識をもって照射を与えられることを望みたいと思う。

貞光君のこの書の上刊をこころから祝福し、学会をはじめ文壇、歌壇などの諸賢の清鑑を得たいと思うものである。

昭和五十四年重陽の日、東京杉並・高井戸の風鳥居にてしるす。

第一章 左千夫の短歌世界と交友

左千夫における写真と万葉歌……………	一一
「叫びの説」の性格——左千夫晩年の歌論——	二六
左千夫における自然主義の影響……………	四九
左千夫と節——作家的対峙——……………	七九
二つの「山会」——左千夫における自己発見——	九八
明治期における左千夫評価……………	一三五

第二章 左千夫と万葉集

左千夫における万葉集の受容……………	一四九
左千夫短歌におけるナシヨナリズム——万葉理解を通して見た——	一七三

第三章 左千夫の弟子

左千夫と茂吉——初期選歌を通して見た師弟——	一九一
茂吉と万葉集	二〇九
『赤光』と連作の世界——左千夫・茂吉・誓子——	三一九
伊藤左千夫年譜	三五〇
あとがき	三五九

第一章 左千夫の短歌世界と交友

左千夫における写実と万葉歌

一

「歌よみに与ふる書」において正岡子規は当時まだ勢力のあつた旧派歌人たちの、貫之をはじめとする古今集の歌を手本にして因襲的な手法によつて陳腐な題詠を続けていた態度を痛烈に攻撃し、古今集にかわつて万葉集や源実朝の歌を再評価し、主観的題詠によらず、客観を重んじ、みずからの美とするものを忠実に写生すべきことを説いた。そして自身でも万葉調の写生的な歌をよんで根岸短歌会を開いた。会に出席した香取秀真・岡麓・伊藤左千夫・長塚節らだけでなく、間接的ながら子規の影響をうけた島木赤彦・斎藤茂吉らにおいても、大きくひつくるめて根岸系歌人においては、いずれも古典の中で特に万葉集を高く評価し、写実主義短歌を提唱し実践した点が大きな特色で、それが短歌史的な意義となつている。

左千夫の場合も例外ではなく、人麿作歌をはじめとする万葉歌を特に重んじ、「心の花」やみ

ずから主宰した「馬酔木」「アララギ」誌上等において「写生」「写実」について、しばしば発言している。ところが左千夫における「写実」の概念は、きわめて独自で特殊なものであり、一般に行なわれている「写実」の概念と異つたものであるので、ここで万葉集とのかかわりの中で、彼の短歌観、特に「写実」ということについて検討してみたい。

二

左千夫は明治三十三年一月二日、^(注1)はじめて子規庵を訪れ、同月七日から子規庵の短歌会に会員として出席するようになった。以後、左千夫は次第に子規の主宰する根岸短歌会のもつとも熱心な会員となつていくのであるが、根岸短歌会に加入する以前、「はるその(春園)」と号していたころに、すでに左千夫が万葉集に親しんでいたことは、次のような点からうかがえる。

まず、古泉千樞の「伊藤左千夫について」^(注2)によれば、左千夫は明治二十九年に『万葉集古義』を予約購読したという。

また、左千夫は「上田秋成の歌」^(注3)において、歌や茶道の師であつた伊藤並根から荷田春満の色紙短冊を贈られたころのことを、「予は当時春満真淵などをば、非常にえらいものと思つて居つた時分であるから……」と書いている。これは明治二十九年前後と推定されるが、このころすでに加茂真淵の歌も読んでいたことがわかる。

さらに、明治三十一年二月十日、新聞「日本」紙上に発表した、左千夫の「非新自讃歌論」には、「歌の模範てふ歌」として、真淵の歌二首、古今集の歌一首と共に、

田子の浦ゆうちいでてみればましろにぞ富士の高峰に雪はふりける

という万葉集卷三・三一八番の山部赤人の歌を挙げている。

右の「非新自讃歌論」に寄せられた小隠子なる者の批判の文章に対する駁論「小隠子にこたふ」は二月二十三日、四日の新聞「日本」に掲載されたが、ここでも左千夫は、歌が「調を本とするの心」を示す一例として、真淵の歌一首とともに、万葉集から

あさか山かげさへ見ゆる山の井の浅き心をわれもたなく(注も)

という卷十六・三八〇七の歌を挙げている。「非新自讃歌論」と、その続編ともいふべき「小隠子にこたふ」において左千夫が模範として引用した歌六首の中に、真淵の歌が三首、万葉集の歌が二首、それに対し古今集の歌が一首というあたりに、明治三十一年当時の彼の真淵および万葉集を尊重する短歌観がうかがえよう。

前述の「非新自讃歌論」は、明治三十一年二月七日の新聞「日本」に掲載せられた小出祭の歌「新自讃歌」を批判したもので、今日見られる左千夫の歌論として最初のものであるが、そこで左千夫は

かれ歌てふものは古今の歌聖が教のごと調をもととして心の句をあらはす者ぞ。されば心のみはいかにうつくしくいかにみやびなりとも調のととはぬはいまだ歌とは云ひがたきな

り。まして心も調もいやしげなるをいかで歌とはいふべき。

と述べる。「心」よりも「調べ」を歌にとつて本質的なものと考え、「調べ」によつて「心」が外に現れるとするもので、のちの「叫びの説」に通ずる短歌の音楽性を重視する傾向がここにかがえる。この、調べを重視する短歌観は、彼が当時親しんでいた真淵の

(注5) 古の歌は調を専とせり。うたふ物なればなり。

という考え方の影響をうけたものと考えられる。

左千夫は明治三十年から桐の舎桂子(閔澄氏)の歌会に出席するようになってゐる。桐の舎桂子は橋東世子の門人で、師の東世子は国学者橋守部の子、冬照の妻であつた。左千夫が真淵に傾倒し、万葉集に親しむようになったのには、守部の系統を引く東世子や桂子の影響があつたものと土屋文明(注6)は見ている。

三

明治三十三年元旦の新聞「日本」に、子規の選で「第一回募集歌新年雑詠」入選歌が発表され、左千夫の歌も三首入選した。それがきつかけとなつたものであろう、「二」で述べたように左千夫は一月二日、子規庵を訪れ、同月七日の会から、短歌会にも引き続いて出席するようになり、また同年四月から始まつた万葉集輪講会に出席するに至る。当時の左千夫の歌について子規は、

(注7) 左千夫氏の歌は趣向の平淡なる者(寧ろ趣向無き者)を好み之を運用するに万葉の文字を以てす。故に其佳なる者は万葉に出入し然らざる者は無味乾燥に陥る。と批評している。

「二」で述べたように、左千夫は子規入門以前からすでに万葉集に親しんでいたが、入門後、短歌会や万葉集論講会に参加するようになって、さらに万葉集を重んずる傾向を強くするようになった。明治三十三年春ごろの子規庵における短歌会の席上、出席者がみな誤解して失笑した「こやる」という語について、「こやす」は「病氣をする」意の敬体であるから、常体の場合は「こやる」というべきであるということを左千夫が『古義』を引用して弁じたことが新聞「日本」に載った子規の文によって知られるし、同年十一月発表の「歌に就きて吾が今日の考」では

(注8) 貫之的定家的の歌が文学上極めて価値少き物であると云ふことは、最早世の有識者間一般の認むる所……真に万葉を知り、万葉を解する者極めて少きは、吾輩の痛嘆する所なりと述べている。

このように左千夫が万葉集を尊重する理由は右の文では明らかでないが、明治三十四年の三月から六月にかけて発表された「新歌論」で明確に述べている。

左千夫は、まず

(注10) 歌人が古歌を研究する、もと自己が創作の原本に資すべきもの、恰も工芸家が古美術品を研究して自家の製作に資するが如かるべきなり。